



発行所  
山口県小学校長会  
代表者 村川直樹  
校長会事務局  
山口市大手町2-18  
☎ 083-925-2919  
FAX 083-925-6776  
印刷所  
大村印刷株式会社

## 今だからできる 教育活動の創造を



山口県小学校長会 会長 村川直樹

### 一 はじめに

一年前には、想像だにしなかったコロナ禍によって、世の中の生活環境は一変した。今回の感染拡大は、「我々は人・物・情報が行き交うつながりの世界で生きている」という現実を再認識させるとともに、「命・健康を守りながら、「働く・学ぶ・生活する」などの活動をどう成り立たせるのか」という課題を突きつけている。

当然ながら、学校教育もこのような状況下で大きな影響を受けている。

### 二 山積する課題

六月に県内全ての小学校で教育活動が再開され、衛生管理を土台に、少しずつ正常な状態に近づいてきた。

しかしながら、一ヶ月半に及ぶ休業期間によって生じたギャップの解消や感染予防策など多面的な対応を求められる学校現場は、様々な課題に直面しており、それは、教育課程の編成・実

施にも大きく関わっている。

まず、「学習内容の年度内履修」、「学び残しへの対応」など時間確保に関する量的な課題と「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善」、「ICTを活用した授業づくりの研究検討」など質的な課題があげられる。これらは、教科学習を中心とした「学びの保障」に関わるものである。

次に、社会見学、自然教室、修学旅行、運動会といった大きな学校行事の可否及び代替案の提示についての判断をどうするかという課題がある。これは、特別活動、総合的な学習の時間等の教科外の教育活動を通して「学びの保障」であり、子どもの学校生活への意欲化を支える「楽しみの保障」でもある。

### 三 見通しと根拠をもった判断

校長は、時々刻々と更新されるコロナウイルス関連の情報を的確に把握し、

地域内の学校と取組を共有しながら、「今すぐ判断し取り組むべきこと」「基本的な方針を示しつつ状況に応じて判断すべきこと」という時間軸を意識した整理が必要である。

同時に、取組の実現に向けて「チーム学校」をどのように機能させるかという実践の質的向上を意識した整理も大切である。

そこで、校長は、合意形成過程よりもスピード感を重視して基本方針を提示し、教職員を中心とした協議のちに、必要に応じて修正していくようにしたい。具体的な内容については、各部の素案を調整して全体で検討する一方で、必要な支援を学校運営協議会等に依頼・協議できる準備を整えておきたい。

また、行事の可否や代替案の提示については、子どもや保護者の思いや願いを踏まえながらも、何より安全性の確保を優先するとともに、「子どもにどんな力を付けたいのか」を明確にすることが大切である。

行事によっては、中学校区で判断を統一するケースもあるだろう。しかし学校にはそれぞれの事情があり、立地環境や規模も違う。近隣の学校での判断に差異が生じても仕方がないのであり、だからこそ、判断の根拠は明確にもっておきたい。

### 四 子どもを主体とした取組の推進

このような状況であっても、「今だからできる」として、「子どもを主体とした取組」を三点提言したい。一つ目は「学校生活の担い手として

の自覚と参画」である。これは、子ども自身が、他の悩みや不安、学級や学校の課題を認識し、その解決・改善に向けて仲間と協働し行動に移していくことであり、自分で工夫を重ねるなどして、行事への参画を含めた「楽しみ」を創造することでもある。

二つ目は、「地域の担い手としての自覚と参画」である。確かに、今できることは少ない。しかし、例えばマスクの下から元気な挨拶の声が聞こえたら、相手はどう感じるだろうか。子どもへの影響力は、案外大きいのである。

最後は、「学習者としての自覚と参画」である。これは、課題の達成を意識づける授業の仕掛けが肝となる。互いに高め合える雰囲気の中で、様々な対話を通して、自分の考えを打ち立てるとともに、自己の達成状況を問いかけて修正する活動を仕組む必要がある。教育活動全体で、個々の学びを調整できる力をつけていきたいものである。

### 五 おわりに

今回のコロナ禍を通して、これまでの「当たり前」は見直されていく。オンライン授業に向けての整備やタブレット端末等を活用した個別最適化された学習も進んでいくに違いない。

しかし、つながりによって学ぶ意義も再発見された。困難の中でも、子ども主体の学びと生活を確立するために、教師集団が主体性を発揮し、校長がその動きづくりの中核となるよう校長会もつながりを深めていきたい。

# 令和 2 年度の 研究 紹介

## <研究主題・副主題>

自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進  
～高い志をもって 他者と協働し 新たな価値を生み出す  
子どもを育てる開かれた学校経営の展開～

## <校長会関連研究大会>

- ◆山口県総会並びに春季教育研究大会  
5月8日(金) 山口県健康づくりセンター  
(新型コロナウイルス感染症予防のため書面開催)
- ◆中国地区小学校長会教育研究大会山口大会  
山口県小学校長会秋季教育研究大会山口大会  
11月13日(金)  
(新型コロナウイルス感染症予防のため誌上発表)
- ◆全連小京都大会  
10月29日(木)・30日(金)  
(新型コロナウイルス感染症予防のため誌上発表)

### 岩国・和木支部【研究・研修】

学校の教育力向上を図る研究・研修の推進  
～小中一貫教育の充実に向けて、地域連携及び学校間連携を生かす～

本支部では、地域資源・人材活用の活性化や、校内の核となる人材育成、学校の組織力向上等の成果を踏まえ、小中一貫教育の充実によって学校の教育力向上を図ることとした。

#### 一 研究仮説について

小中一貫教育の充実に向けて取り組んできた「連携」を生かし、教職員の資質向上と学校の組織力向上を図ることができれば、学校の教育力の一層の

#### 二 研究視点と研究の実際について

向上に寄与できるのではないかと、  
〔研究視点1〕  
「連携」を教職員の資質向上に生かす  
〔研究視点2〕  
「連携」を学校の組織力向上に生かす  
なお、研究の過程において、校長の役割及び指導性を見いだし、その認識を深めていくこととする。

### 柳井支部【健やかな体】

健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント  
～スクール・コミュニティを生かし、課題解決の質を高める校長のリーダーシップ～

子どもを取り巻く社会・生活環境の多様化・複雑化に伴い、一部の運動への偏りや運動習慣の二極化等を要因とする体力・運動能力面の課題、夜型生活習慣の浸透等の生活様式の変容を要因とするメディア依存や喫煙、薬物乱用等の健康面の課題が山積している。学校では、これらの課題に対応するために、子どもが自らの実情に即して

課題解決の質を高める校長のリーダーシップがある。そこで、本支部では、スクール・コミュニティを生かし、本教育が全教育活動の中で意図的・組織的に取り組まれるよう計画を整え、様々な組織との連携を強化する。さらに、体育科教育や健康教育等の実践から、具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

### 大島支部【知性・創造性】

主体的・対話的で深い学びにつながる  
カリキュラム・マネジメントの実現に向けて

少子高齢化や人口減少、地場産業の衰退などに伴う本町の課題に対応していくには、社会の変化に主体的に関わり、解決していくこととする豊かな知性や創造性を育む必要がある。

そこで、本支部では、主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善と学習効果が上がるカリキュラム・マネジメントの実現に向けて、町内の小学校が

連携し、①小規模校のよさを生かし、児童の主体的な学びを促すガイド学習や見守り型支援を取り入れた学習指導の工夫、②小規模校のデメリットを最小化し、多様な考えに触れて他者と学び合う拡大集合学習の活用、③地域の教育資源を効果的に活用する地域連携教育の推進の三点を通して、校長が果たすべき役割について究明している。

### 周南支部【リーダー育成】

学校運営を担うリーダーの育成  
～連携を通じたリーダーの育成と校長の役割～

教職員の大量退職時代を迎え、教職員の資質能力の育成が喫緊の課題であることから、本支部では昨年度よりリーダー育成の在り方について研究を進めてきた。昨年度、学校運営を担うリーダーには、「企画力」「調整力」「広い視野」の三つの力が必要であり、この三つの力は様々な人との関わりの中で育成することができると考え、「連携」

本年度は、研究のスタート時に実施した意識調査を再度実施し、前回調査の結果と「世代別」「校務分掌別」に比較することで、研究の成果と課題を明確にした。その上で、課題としてあがった「広い視野」について、そのとらえ方及び育成のための校長の役割について研究を更に深めていくこととした。



下松支部【学校安全】

地域社会との連携を図った防災教育・安全教育の推進と校長の役割

本支部では、避難訓練、危機管理研修、シミュレーション訓練等の取組を基盤としながら、関係機関、家庭、地域、校種間との連携を図り、総合的な防災教育・安全教育の充実に向け、校長の果たすべき役割について研究を進めている。

研究を進める中で、校長の役割として、次の三点の充実に取り組んでいる。

- 学校と行政・地域・関係団体等が連携した取組のコーディネート
  - 防災教育・安全教育に係る教職員の意識の向上
  - 保護者・地域住民の防災意識を高めるための情報発信の工夫
- この三点を持続性のある取組にしていくために、校長の役割について研究を一層深めていきたい。

光支部【危機対応】

学校と子どもを取り巻く危機への対応

危機管理体制の組織・連携づくりと危機対応能力の育成

昨年度からの感染症対応を含め、学校では様々な危機管理・危機対応が求められている。そこで本支部では、右副主題により研究を進めている。

一 研究の概要

- (一) 組織的な危機管理体制の構築
  - ①実効性のある引き渡し訓練や、地域と協働した危機対応訓練
  - ②感染症拡大防止対策策定と実行
- 二 校長の役割
  - (一) 危機管理体制構築
  - (二) 危機意識・対応力の向上
    - ①KYT学習や防災・保健教育
    - ②児童による安全マップの作成
  - (三) 未然防止・実践的研修の企画

山口支部【社会形成能力】

社会形成能力を育む教育の推進

三つの視点(「コミュニケーション能力の育成」「キャリア教育の推進」「地域連携の充実」)からの取組

本支部では、一昨年度から二年間、本研究主題での研究を進めている。

初年度は、社会形成能力の要素となる力を「多様な人々と関わる力」「自己成長できる力」「地域の一人員としての自覚や役割を果たす力」と捉え、これに沿って「コミュニケーション能力の育成」「キャリア教育の推進」「地域連携の充実」の視点から各学校の実態

に「キャリア教育の推進」「地域連携の充実」からの取組に応じた取組を推進した。今年度は、初年度の成果と課題を踏まえ、「教科横断的な視点による取組・持続可能な取組とするための体制整備」「小中連携を意識した取組」「地域連携カリキュラムと学校評価をリンクさせた取組」について研究を深めた。継続した研究で、カリキュラム・マネジメントの重要性が再確認できた。

宇部支部【自立と共生】

自立し、共に生きる力を育む教育の推進

宇部SDGs推進事業を踏まえて

本支部では、三カ年の研究計画のもと、年次ごとにサブテーマを定め、その方策と成果を積み上げながら、日々、研究実践に励んできた。一年次は環境教育、二年次は特別支援教育を切り口に取組み、大きな成果を得た。

そこで、今年度はそれらの研究成果を生かしながら、宇部市が取り組んでいるSDGs推進事業を踏まえて本研究

- 研究主題の解明に迫ることにした。
  - 研究の視点は、次のとおりである。
  - 一 SDGsの視点からのカリキュラムのとらえ直し
  - 二 新たな教育活動の創出
- 特に官学民が連携した宇部市の取組において、その方策と成果を明らかにすることで、校長としての役割と指導性を究明していきたい。

美祿支部【経営ビジョン】

学校・家庭・地域と共有する学校経営ビジョン

それぞれの参画意識の向上を通して

本支部では、教職員・保護者・地域住民の参画意識の向上を学校経営改善の視点としてとらえ、研究に取り組んだ。

- 一 はじめに
- 二 研究の概要
  - (一) 教職員の参画意識を図る取組
  - (二) 家庭・地域の参画意識を図る取組
- 三 校長の役割
  - 分かりやすい学校経営ビジョンの策定と参画を促す仕組みづくり
  - 目標設定と目指す児童像の共有
  - 情報発信、教職員の意識の高揚
- 四 おわりに
- 経営ビジョン策定のプロセスから教職員と協議を重ねたことで、理解と参画意識が生まれ、組織力が高まった。

下関支部【評価・改善】

未来の創り手を育成する学校経営の評価・改善と校長の役割

本支部では、「児童、教職員、保護者、地域のやる気(参画意識)」を引き出す評価・改善の在り方」を視点として、研究に取り組んできた。

- 一 研修会の実施
- 二 学校規模別協議・全体での共有
  - (一) 児童、教職員、保護者、地域宛の評価アンケートの項目や内容をそろえ、中学校区で共有
- 三 校長の役割
  - (一) 役割意識・当事者意識の啓発
  - (二) 当事者の日々の取組の中で目指す目標の位置付け
  - (三) 当事者の取組を折に触れ評価

# 取組紹介

## 「管理」

危機管理に対する管理職の関わりについて

岩国市立通津小学校長

濱崎 幸貴

これまで、中学校での勤務が多かったこともあり、小学校における危機管理について、特有の困難さを感じるものがあつた。そのような視点から、本校が「危機管理」において重要と考えて取り組んでいる二点を挙げてみたい。

### 一 情報収集の重要性

危機管理において、正確な情報を迅速に収集することが最も重要である。

学級担任が多く、時間を同じ児童と過ごす小学校では、ともすると担任の判断で、管理職への報告や保護者への連絡が後手に回ることがある。報・連・相の徹底は言うまでもないが、本校では生活アンケートの結果をパソコン上で共有している。情報を可視化するシステムを構築する必要性がある。

### 二 組織的な対応の重要性

小学校の職員室は、授業中、教員がほとんどいない。従って突発的な事案

が起こつた際に、迅速な対応をするためには、管理職が保健室、事務室等と連携ができるかどうかのポイントとなる。普段から、養護教諭や事務職員と

情報を密に交換できる人間関係を築いておくとともに、危機が起こつた際の連絡・対処方法を可能な限り具体的にしておくことが重要である。

### スクール・コミュニティで危機管理

柳井市立余田小学校長

廣池 康子

新校舎が公民館と一体型になったこともあり、本校では毎年、地域と一緒に「緊急時シミュレーション研修」を行い、危機管理意識と組織力の向上を図っている。「食物アレルギー既往者がアナフィラキシーショックを発症」、「廊下に倒れている児童を発見」、「児童が熱中症の症状を発症」など、少しずつ設定を変えて、一度に二回、教職員と公民館職員が、アクションカードを使って自分の動きを確認する。一回目のシミュレーション後に気付きの報告と消防署からの指導を受け、再度別の設定で改善を加えて訓練を繰り返す。その他危機対応をテーマにした校内研修や、保護者も参加する避難訓練などを、計画的に何度も行っている。

四月に着任して以来、こうした研修等を通じて人がつながる学校づくりを心掛けてきた。また COVID-19 対策を含めた児童の危機管理意識の向上も、重点プロジェクトの一つとして実践を進めている。スクール・コミュニティの力を結集して児童の主体性を育

成し、工夫改善を重ねて組織力を高め、安心・安全で笑顔が輝く余田小学校で在り続けられるよう努めていきたい。

### 安心・安全な学校・地域づくり

つながりを基盤として

光市立岩田小学校長

生田 光徳

光市の山間部に位置する本校は、豊かな自然と人を想う心に満ちている。この地に勤めると、「危機管理」には温かな「つながり」が欠かせないと強く感じる。取組を三つ紹介する。

【家庭間の「つながり」】西日本豪雨後、登校班内に連絡網を構築。学校発の注意喚起メールを受け、自主的に家庭間で連絡を取って登校方法を決定しただけの信頼と共助の体制ができた。

【地域との「つながり」】本校を含む大和地域四小学校児童は、五年生時に「ジュニア福祉員」の任命を受け、「わたしたちの行いで地域を幸せに」と誓う。本地域には、児童も地域の一員としての自覚をもち、安心・安全な学校・地域づくりに貢献する風土がある。逆に、学校・地域一丸となつて児童にそうした意識を育むことで危機の未然防止や対応につながると考えている。

【学校間の「つながり」】小中一貫教育の起年となる今年、感染症対策を始め「危機管理」の部分でも協働。中学生が、母校の小学校で挨拶運動を展開する新たな取組も実現した。

「つながり」はネットワークを育む。「やまぐち型地域連携教育」に「安全面」での新たな可能性を私は見ている。

学校における危機管理

山口市立二島小学校長

辻本 紳一朗

附属池田小の不審者対応訓練を参観した際、自分のこれまでの危機管理意識の低さを痛感し、東日本大震災時には、被災地で学校の安全管理について再認識した。今も海外の学校に勤めていた頃の日常的な危機意識が薄れてしまっていることを反省する毎日である。

学校は安全な場所、という認識を社会はもっている。学校がそうした場所であるために教職員は意識を高め、システムや環境を整える必要がある。

そうした中、本校では様々な研修を通し、より実際の場面を想定した訓練を実施している。予告なしの防災避難、園児と一緒に避難する訓練、殺傷行為後に興奮状態で校舎に飛び込む不審者への対応訓練、ランドセルを背負った状態で不審者から安全に逃げる児童の訓練などである。

こうした取組は、小規模校では特に大切だと考える。一人一人の児童や教職員の安全意識、危機管理のスキルを高めておくことが必要となるからである。とはいえ、予期せぬ事態に対し、我々教職員がとつさに正しい行動がと





# 各校の

## 今回のテーマ

# 「危機」

れるかは大きな課題である。日々の当たり前を見つめ直し、危機管理のイメージを深め具体化するとともに、児童の安全を守るために我々ができるより確かな対応に向け、今後も研修に努めていきたい。

起きた後の苦労より起こさない苦労を

山口県小野田市立高泊小学校長

小戸 毅

初の小学校勤務を新任校長として迎えた二年半前は、日中がらんとした職員室、聞いたこともない給食列車なる言葉などに戸惑いや不安を覚えてのスタートだった。だが、すぐにその不安は払拭された。そこに有能な教職員集団があったからである。ただ、危機管理能力、特に組織力については、まだまだ高めることができると感じた。

そこでまず、「情報は組織の血液である」との意識を強くもたせ、情報共有を徹底させた。正確な情報があつてこそ正しい判断が下せるもの。また、

組織対応をするためには、情報の共有が欠かせないからである。

次に、危機管理のいろはを再確認するとともに、「マニュアルに完成形はない」として常に見直しを行わせ、教職員の危機意識が持続するよう仕向けた。そして今は、「起きた後の苦労より起こさない苦労をしよう」を合言葉に、危機の未然防止に力を入れている。教員の勘は意外と当たる。「あれっ?」と思つたら動け。動くか待つか迷つたら動く方を選べ、と論じている。

危機管理に油断は禁物。今後も全教職員で危機管理に努めていきたい。

地域の力を借りて

下関市立江浦小学校長

藤井 智寛

危機管理について、あえて本校の特徴をあげるとすれば地域との連携・協力ではないかと思う。

本校正門付近と裏門には、毎日四名の交通指導員さんが子どもたちの登下校を見守つてくださっている。この方々は、学校からすると貴重な情報源であり情報発信源でもある。この方々がつかんでいる子どもたちの情報は、スピーディーでダイープである。毎日顔を合わす子どもたちの表情やしぐさ、帰る道すがらの子どもたちの会話などからの情報は、教職員ではつかみにくいものも多く、トラブルの未然防止や解決の糸口になることも少なくない。また、地域に深く根ざしているこの方々は地域での人脈も広く、学校の様子を地域に伝える広報役としても代えがた

い存在である。さらに、日頃からコミユニティールームを利用され、校地内校舎内の危険箇所などもよく把握もされており、相談すればすぐに修理もしていただけるありがたい存在である。

校長としての私の役目は、この方々との連携・連絡を密にすることであり、今後校内外の風通しをよくすることを中心掛け、危機管理に努めていきたい。

臨機応変に対応できる力

萩市立多磨小学校長

岡本 香

「はい。あなたはこのカード。」「救急車誘導」や「本部記録」などのカードを渡された職員が、一斉に動き始める。アクションカードを使った緊急時対応訓練の一コマである。

本校は小規模校であり、別の役割もできるように交替しながらの実技研修は非常に有効だ。

自然災害や事件事故など、常に高い危機意識をもって対応できる力を組織として備えておくなくてはならない。

今回の新型コロナウイルスによる突如の臨時休業。初めこそ、先が読めず慌てたが、新年度当初、午後の授業を未履修の補習に充てることで、短期間で履修を完了させることができ、再開後のスムーズなスタートにつながった。

先日の引き渡し訓練でも、ソーシャルディスタンスに配慮した動線で実施することで、前年度より効率的に引き渡せる結果となったのである。

今後、感染症対策を含む最善の危機管理に努め、教育活動を進めていき

たい。どんな変化にも臨機応変に対応できる組織をつくること、児童自身が様々な課題に対応しようとする力を育てることを大切にしながら。

安心・安全な地域づくりに向けて

長門市立明倫小学校長

河合 辰雄

本校の所在する長門市三隅地区では、毎年、秋に「地区合同避難訓練」が実施される。保育園、小学校、中学校、公民館、文化センター等、地区内の教育施設が中心となつて行ってきた訓練であるが、多くの地域住民も自主的に参加をされるようになり、今や三隅地区全体の大切な行事となつている。

訓練は、地震と津波の発生を想定したもので、揺れの間は机等の下に身を隠し、揺れが収まった後に、二次避難場所まで全員が歩いて移動、確実な安全確保を図るという内容が進められる。

開始当初は、学校を中心とした取組であったが、行政の協力を得て、地域全体を巻き込んだ取組に発展してきた。

不審者、台風、大雨等々、昨今、危機的な事案はいつどこで発生しても不思議ではない。有事の際、まずは子どもたちが自分の命



もたちが自分の命を確実に守ることができるよう、重ねて周囲の人の安全確保に貢献できるような訓練・取組を各所と連携し、実施していきたいと考えている。

支 部 情 報

下 松 支 部

「七星降臨伝説」となれるか

下松セブン

下松市は、「二十一世紀は心の時代（笑い・花・童謡のまち）」のキャッチフレーズのもと、「住みよきランキング中四国地方部門」九年連続ナンバーワンに輝くほど、都市と自然のバランスの取れた住みよい市である。

昨年度の山口県小学校長会秋季教育研究大会では、県内から多くの校長先生方にご参集いただき、ありがたく感じている。十分なおもてなしはできなかったが、コンパクトな県小学校長会の運営を目標に掲げ、多少なりとも業務改善された大会の実現に向けて、一石を投じることができたのではないだろうか。

本支部では、「地域とともにある学校づくりの推進」「確かな学力と個性を育む教育の充実」「豊かな心と健やかな体を育む教育の充実」「組織的・機動的な学校づくりの推進」の重点目標実現のための取組を通して、下松市教育の基本目標「心豊かに生きる力を育む」の具現化に努めている。

特に、コロナ禍での感染症拡大防止対策においては、市教委と小中学校長会との強い絆と信頼関係のもと、共同歩調かつ各校の特色を生かした創意工

夫によって、様々な対策を講じたことは、コンパクトシティ下松の利点を十分に生かした成果であると自負している。

最後に、下松には、「七星降臨伝説」がある。推古天皇の時代、松の木に大星が降ったことから、「星が降（くだ）った松」が「下松」になったという伝説である。昨年度、小規模校の米川小学校が、休校となったことにより、今年度、下松市の小学校は、七校となった。まさに、「下松セブン」である。

七人の校長が、互いに情報と成果や課題を共有し、それぞれの個性を發揮しながら、各校の児童・教職員・保護者・地域住民を牽引する「七つの星」となれるよう、今後、強い団結力と組織力・機動力をもつて、実りある支部運営を行っていききたい。

下松市制 80 周年記念事業  
市内全小学校児童の投票で  
選ばれた  
下松市マスコットキャラクター  
「くだまるくん」です



(中村小学校長 松本敏訓)



地域の魅力を生かして



上関町立上関小学校長

伊藤 雅章

「花咲く海の町」。本町のキャッチフレーズである。学校正門までの上り坂の途中には、地域の方と児童が一緒に植えた六百本の色とりどりの花が、来校者を出迎えている。学校は、山の中腹に立地し、瀬戸内海の穏やかな海に囲まれ、教室の窓から港や海が見える。その風光明媚な自然に大変魅力を感じている。また、村上水軍が、この地に城を築き、朝鮮通信使もこの地を訪れるなど、歴史的な要素でもある。

本町では、平成十八年の総合小学校の新設開校を契機に、小中一貫教育に取り組んでいる。小中学校が目指す児童生徒像を共有し、長いスパンでできるだけでなく多くの教職員が一人一人の子どもに関わり、九年間で育てるという構えをもっている。学校・家庭・地域などが連携し、地域ぐるみで、この恵まれた自然、社会的環境を生かした教育活動を、ぜひ実践していききたいと思っている。しかしながら、一つの小学校と一つの中学校で、本町全体の義務教育を担うという責任の重さに、身の引き締まる思いでもある。この素晴らしい環境を活用しながら、子どもたちの育成に、微力ながら尽力していききたいと思っ

新校長の声

大きなくすのきのように



美祿市立淳美小学校長

松尾 千秋

今年の春は、新型コロナウイルス感染症拡大の中、かつて経験したことのない新年度を迎えた。美しく咲く桜が色あせて見えるような、不安の中での着任だった。

本校では、四月八日に始業式・入学式を行い、新年度をスタートさせたが、九日後には休校となった。子どもの姿がない学校で「今できることは何か」全職員で考えた。

学習支援や草刈りなどの環境整備、HPやメールでの情報発信に取り組んだ先生方、昇降口に設置した学習支援ボックスの学習課題を定期的に取りに来てくださった保護者の皆様、再開に向けて飛沫防止ガードを製作してくださった地域の方など、学校に関わる多くの方々のお力と力が一つになり、この難局を乗り越えることができた。

淳美小学校の校庭には、この地に校舎を移転した際に植えられた樹齢百二十年を超える大きなくすのきが子どもたちを見守るかのように立っている。はじける笑顔で学校に戻ってきた子どもたちが、この木のように根を張り、枝葉を茂らせることができるよう、これからも学校・家庭・地域が力を合わせて淳美っ子の育成に努めていきたい。





「元気に大きく育つてね。」豪雨続きの七月も半ば、久しぶりに広がる青空の下、子どもたちが

傾けたバケツの中からトラフグの稚魚が勢いよく躍り出る。押し寄せる波にまっすぐに挑む稚魚もいれば、波打ち際に押し戻される稚魚もいる。みんながみんな勢いよく前進できるわけではないのは人間も同じ。放流される稚魚の姿に、いつか外の世界で採まれることになる子どもたちを重ねてしまうのは、小規模校教員の性だろうか。

鼓南小学校は、フグ延縄漁発祥の地にあった大島小学校と太華山の東側にあった大島小学校が統合され、鼓南中学校の敷地内に建つ開校八年目の小学校である。

本校のキーワードは「連携」である。過疎化の波に飲まれていく地域だが、学校に寄せる思いには熱いものがある。昨年度立ち上げた「鼓南小中学校応援団」は現在七十名を超え、十一名の児童一人につき七人以上の応援団がついている。加入資格は、鼓南小中の子どもたちのために力を貸してくださいる人なら、住所も問わず、協力内容も問わない。除草作業から、子どもたちの成長を願うだけという応援の仕方でもよい。子どもたちにとっては、応援してくださいる誰かがいるということが大きな力になると考えるからだ。また、鼓南中学校との協力体制も大

きい。中学校の教員が教科担任として授業をしたり、昼休みには中学生と小学生が入り交じって楽しくふれあい活動をしたり、小中の教職員が日常的に互いの校舎を往来したりしている。中一ギャップなどありようもない。

そして、他校と大きく違う「企業との連携」がある。校区内をパイプラインが走る日本精蠟株式会社との連携である。学校運営協議会にも加わっていただし、工場見学などのキャリア教育だけではなく、運動会や文化祭、海岸清掃など、学校支援を通して地域の活性化にも大きく貢献していただいている。

「碧く輝く 鼓海に今日も 魚のように 跳ねて行け 遙か世界を 夢見る丘に 望みは高く 果てしなく 未来に向かって 伸びて行け」

この校歌の歌詞のように、いつか子どもたちが大海に向け泳ぎ出すその日のために、今日も保護者、地域、中学校、企業と力を合わせ鼓南小ならではの教育活動を積み上げていきたいと思う。

校是：「輝<sup>き</sup> 咲<sup>しょう</sup>」**「みんな輝け とりどりに咲こう」**  
周南市立鼓南小学校長 菊野良

# 飛耳長日

口癖は心癖に、心癖は口癖に  
宇部市立黒石小学校長 小松茂文



「ああやって挨拶が返ると、本当に嬉しくなります。ありがとうございます。お姉ちゃんが下の子を連れて行くようになったんですね。」

「おはよう」と声をかけてくださり、た子どもたちに微笑みながら手を振ってくださいました。お礼の言葉を述べてくださり、さらに歩いていく子どもたちを慈しむように、「学校が再開されて何よりです。しかし、もう紫陽花の季節になったんですね。一年たつてどの子どもも大きくなりました。こ

うやって子どもたちの成長を見ることができて、本当にありがたい。ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」とおっしゃった。再度のお礼をお伝えし学校に向けて歩きながら、私は周防大島町を経て現任校で三校目の校長勤務となるが、そのどの地域においても「ありがたい」を口に出される方が多いこと、そしてどの地域を歩いていても「ありがたいございます」と、お声

をかけていただくことが多かったことに改めて思い入った。私たちのふるさと山口には、「ありがたい」をはじめとして感謝の言葉を日常とする、温かみで奥深い文化風土がある。言葉こそが人と人をつなぐ。そして「口癖は心癖」になり、「心癖は口癖」となる。先人から受け継いだ、ふるさと山口のもつこの温かな「口癖」と「心癖」を、子どもたちに確かに引き継ぐ必要があると改めて思う。

その温かさの継承のためにも、実現は誠に困難であるが、私は以下の三点を学校経営の核に据えている。

- 一 子どもたちが「聴き合う関係」の下、「学び育ち合い、深くつながり合う」こと。
- 二 教職員が「お互いの教育実践に敬意を払い、謙虚に学び合う」こと。そして「子どもに敬意を払い、子どもを信頼」し、何より授業において「どの子ども一人にしない」こと。
- 三 学校と地域で「教育という未来への責任を、すべての大人が喜びと共に分かち合う」こと。

「人と人のつながりを、ここまですともたやすく壊す」新型コロナウイルス感染症に対峙しなくてはならない今だからこそ、人権を基底に据えた温かな言葉による「善き口癖と善き心癖」にあふれ、お互いへの「敬意と感謝」に満ちた地域、学校を目指したいと強く考える。

長年にわたり、人権擁護、男女共同参画、まちづくりなど、幅広く活動に携わってこられた門田美和子さん。現在も、要約筆記グループの主宰や人権擁護委員も務めておられます。そのバイタリティあふれる活動の根源にある、地域への思いや子どもたちに関わっている私たちに伝えたいこと等について、話を伺いました。

**\*これまで様々な活動で多くの子どもたちと関わってこられていますね。**

地域活動をしていて子どもたちとの関わりができたというより、全ての子どもに幸せになつて欲しいとの思いから活動が始まりました。戦後の混乱の中で生活は大変でしたが、身近に存在する人権侵害の実態に出会う中で、地域の全ての子どもたちが、自信をもって強く生きていって欲しいと思いました。そして、「そう思った一人が始まらなければ、何も始まらない。その一人になろう」と考え、夫とともに活動し始めました。挨拶やゴミ拾いなどの生活の基本を子ども自身が主体的に考えて行動できるように、また、自ら学ぶ習慣づくりやリーダー養成研修等にも取り組ましました。母親クラブ活動の「まちの子はみんな我が子」という合い言葉に出会ったときは心が震えました。我が子も人の子も一緒に育てていく、親の目が届かない所で地域の人が声をかけてくれる、そうして子どもたちは自分の行動を振り返ることができる。何て素晴らしいことだと、PTA活動

にも参加しました。多くの子どもと関わる中で、本当に辛いことや苦しいことを抱えているときには、何も応えてくれなかった子どもたちが、自分のことを気にかけてくれているということに気が付き、大きく変わっていく姿に出会うことができました。

**\*その後も男女共同参画社会の実現やまちづくり**

探訪シリーズ

この人 この歩み

『人を人として大切に社会に』

NPO法人 山口県要約筆記連絡協議会 主宰  
門田 美和子 さん



もいていいのです。いずれにしても、自分の考えをもつ、自分の考えを表出する、間違っていることは間違っているときちんと言ふ、こうした子どもが育つてくれればと思います。また、子どもたちがより良い社会づくりに努力しようと思えるような社会であつて欲しいと願っています。

まちづくりなど、活動の幅を広げられていますが、その思いは、ずつと、全ての子どもがこの地域に住んで良かったと思えるように、と願つて活動してきました。そして、広い世界へ羽ばたいていく子がいれば、防府の中でずつと暮らす子

**\*子どもと関わる人に対して伝えたいことは何ですか。**

例えば、生活の中で当たり前と思える挨拶や返事の指導でも、一言言つただけではなかなか身に付くものではありません。その子の背景にある諸事情に思いを馳せながら声をかけ続ける、関わり続けることを大切にして欲しいです。子どもの姿を見て、「なんでもありなことをしたのだから」と思うこともありますが、家庭と一緒に地域や学校で関わり合つていくことが必要だと思つています。

**\*これからは。**

子どもへの思いからいろいろな活動に携わり、そこから多くの人とのつながりが生まれ、私の新しい世界が広がっていききました。これまでも、あえて新しいことをしようと思つたわけではありませんが、今やつていなければならないことを、頭と体を使い、可能などころまでし続けたいと思つています。高齢になりましたが、自分の命と向き合つて、淡々と生きていきたいですね。そして、一緒に動いてくださる仲間がもっともつと増えていつたらいいと思います。

「中心は子ども」「子どもたちともにありたい」とおっしゃる門田さん。声なき声に耳を傾けることのできる大人が育つ社会であつて欲しいという願いをもちながら、力強く活動に取り組みされている姿に感服しました。背筋が伸びる思いがしました。(防府市立中関小学校長 三隅敬治)

本部だより

令和二年度の小学校長会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を大きく受けた。五月八日に予定していた総会は中止。新役員、予算案等は書面総会の形で承認を得ることとなった。各支部から書面での承認を頂き、村川直樹会長のもと、新役員が選出され、異例づくめの令和二年度のスタートとなったのである。十一月に山口市にて開催を予定していた中国大会も誌上発表となるなど、小学校長会の諸事業への影響は今も続いている。

各学校においては、新型コロナウイルスへの感染拡大防止の取組に併行して、学校行事の見直し、学びの保障、新指導要領完全実施への対応等々、教育課程一つをとつても山積する課題に向き合う日々である。人材育成、働き方改革の重要性も増すばかりである。

そうした中、子ども、保護者、地域住民等が集い、密接な関わりを通して、それぞれに成長していく場が学校であるという、当たり前がいかにかに大切であるかを再認識したという声も聞く。すでに、三密を避けながら、一方では、互いの関わりを密にするためにどうするかを工夫している学校も多いのではないだろうか。

三密を避けつつ、互いの関わりは密にして現状を改善していくという点では、私たち小学校長会も同様である。